



カンナ

「全地よ」と、呼びかける詩編はこのほかに 6 編ありますが、100 篇は「招きの言葉」として礼拝の折に最もよく聞く詩編です。

全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。(1) と、喜びに満たされて、神に呼びかけるように勧められています。「叫び」ですから、心の奥底から、体を震わせるほどの燃えるエネルギーを放って、神の前に出る姿を思わせられます。日本人は従来神社仏閣などで、参拝する時は、静寂で慎ましく厳粛な感じですが、教会もそれにならっているようですので、「叫ぶ」ことは不可能に思えます。

私は 2000 年にブラジルを旅し、カトリック教会の基礎共同体を形成している貧しい地区の夜の礼拝に参加したことがありました。礼拝堂にはかなりの人々が集まって、礼拝開始を待っていました。やがて、それぞれが自由な感じの音程、リズムでギター、キーボードによる賛歌が始まりました。すると、開いた聖書を両手に掲げて、少女が嬉しそうに入場し、椅子に座っている会衆に見せながら踊るようなステップで聖壇に歩いて行きました。その後から、司祭と助祭が入場してきました。聖書に目を投げかける会衆はお互いに笑って顔を見合わせていました。これこそ 喜び祝い、主に仕え／喜び歌って御前に進み出よ。(2) という言葉どおりです。礼拝は会衆全体の嬉しさ、喜びの発露の場所なのだということをしみじみと感じたものでした。カトリック教会の礼拝は全世界共通の式次第に従って捧げられますが、基礎共同体での礼拝は忘れられない思い出となっています。

知れ、主こそ神であると。主はわたしたちを造られた。わたしたちは主のもの、その民／主に養われる羊の群れ。(3) は、私たち人間の根拠を歌っています。私たちは神の似姿として、愛し合うとの意図を持って神により作られ、育てられ、守られると。神の処こそ、居場所であると。

感謝の歌をうたって主の門に進み／賛美の歌をうたって主の庭に入れ。感謝をささげ、御名をたたえよ。(4) 歌を歌いながら、神の家の門をくぐり、歌を歌いながら神の作られた美しい庭に入っていくという情景は、まさにブラジルの基礎共同体の礼拝そのもののようです。この庭には神が作られた全ての花咲く草々、実のなる木々、枝を飛び交い、さえずる小鳥、虫や蝶も喜んでいでしょう。まるでミュージカルの場面のような華やかさ、美しさ、優しさ、愛らしさが、その所に満ちているようです。

主は恵み深く、慈しみはとこしえに／主の真実は代々に及ぶ。(5) ここに入ってくるのは、主こそ神であると と知る者です。神は弱く、貧しく、助けを必要とするものを恵み、慈しみ、罪を負い、苦しみ、悔いるものを赦される。こここそが人間の居場所といえるでしょう。

100 篇は『讚美歌』の讚詠 557 で親しんできましたが、『讚美歌 21』では 5「わたしたちは神の民」を答唱で賛美しています。148「全地よ、主に向かい」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2010-08-04> は、ジュネーブ詩編歌 134 の曲を採用しています。393「こころを一つに」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2011-04-19> は、詞はボヘミア兄弟団設立者ツィンツェンドルフ、旋律は 17 世紀の民謡から取られたものです。

ジュネーブ詩編歌は教会の鐘の音に続いて、非常に短いメロディで、美しい賛歌です。

<https://www.youtube.com/watch?v=yMiXYkHgWY&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=100>